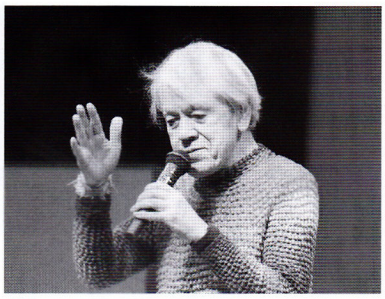
【第二部　トークショー】
「いじめを乗り越えた 子どもの明日はすばらしい！」

志茂田 景樹さん　よい子に読み聞かせ隊隊長、作家



子どものころ、身体が小さくて虚弱だった僕は、随分といじめられました。クラスの悪ガキ風のグループにからかわれたり、小突かれたり、蹴られたりしました。でも、やられた僕が、手加減しているなとわかる小突き方、蹴り方でした。どうせからかわれるならと開き直り、相手を大爆笑させたことがありましたが、それを機に小突かれたり、蹴られたりすることもなくなりました。僕の場合は、開き直ることでいじめを乗り越えたと言えます。でも、これは、今とは時代が違う、あの時代の僕の場合です。

今のいじめは、昔と違って歯止めがかかりません。僕が子どものころは、周りの大人が、たとえ隣の子であろうと、悪いことをやっていたら、「何してんだ、こらっ」と、すぐ止めに入ったので、無意識のうちにルールを学び、子どもたちの世界でも歯止めが効いていたように思います。

＊　＊　＊

今から17年ほど前、僕はフリースクールで特別講師をしていました。生徒たちは徐々に心を開いてくれましたが、一人だけ、話しかけても答えない、無表情の男子生徒がいました。数か月後に情操教育の一環として行ったカラオケの授業をきっかけに、彼は心を開いてくれましたが、後になって、彼がフリースクールに入学するまでの経緯を知りました。彼は、幼稚園の時から、父親に「君はお父さんの出た大学に入ってくれるよな。楽しみにしてるぞ」と言い続けられたそうです。年齢が上がるにつれ、その口癖に重圧を感じるようになり、中学3年のころには、デザイナーになりたいという夢を抱いたのですが、親に伝える機会はありませんでした。高校1年の時、いじめをきっかけに不登校になりましたが、それを知った父親は彼を殴ったそうです。彼は「逆ギレ」し、それから家庭内暴力が始まり、両親の一方的な期待が「ゼロ」になってようやく止みました。その後、彼は自分の意志でフリースクールに入学したそうです。ちなみに現在は、デザインの仕事に就いています。

＊　＊　＊

ちょうど彼が不登校だった時代は、日本の家庭の多くが、子どもたちに部屋を与えた時代です。学校でいじめられても、親には心配かけまいと、「ただいま！」と元気よく帰り、そのまま自分の部屋に入ってしまう。僕らが子どものころは、親は子どもの変化にいち早く気付き、たとえ、いじめがあったとしても、早い段階で学校の先生に相談し、先生はいじめている子に適切な指導ができていたように思います。

今は、いじめがある意味で教育の矛盾を露呈していると思います。われわれは、いじめを社会の問題として捉え、今こそ大いに議論して、新たないじめ対策に取り組まなければならないと思います。